

インタビュー日
令和元年12月20日(金)

芥川賞作家 平野啓一郎さん



写真：瀧本幹也

2019年12月6日に当会で死刑制度や死刑廃止をテーマに講演いただいた芥川賞作家の平野啓一郎さんに、改めて東京でお話を伺いました。

—— 死刑に反対とお考えになるようになったのはどうしてですか。

20代までむしろ死刑存置派でしたが、いいのかなとも思っていました。交流があるヨーロッパの作家たちは、寛容でリベラルな思想の中に死刑廃止が矛盾なく収まっています。彼らの考え方のほとんどに賛成なのに、死刑は違うということに違和感がありました。ただ、反対すべきだから反対ではなく、納得したいと思っていました。

犯罪被害者をテーマとする「決壊」という小説を書いた際、人が人を殺す

のはなぜいけないかを徹底して考えて、死刑にも反対の気持ちが生まれました。

1つは警察への不信です。袴田事件など理不尽な冤罪事件で死刑になる人がいることは不条理ですし、自分にそれが起こることを想像すると恐ろしい。また、人を殺してはいけないという原則に例外を設けてはいけないとも思いました。やられたから自分もという考えではなく、相手はそうでも自分は違う考えの人間だというのが大事だと思ったのです。

大きな罪を犯した人の生育環境は

悲惨な例も多くあります。自己責任論的にその人の問題として死刑にして社会が何事もなかったような顔をしていることに、欺瞞的なものを感じます。

—— 具体的な事件からではないのですね。

ただ、光市の母子殺害事件は存置派的な心情を強める事件でした。被害者も遺族も気の毒で、死刑やむなしとの気持ちを強く持ちました。弁護人の説明も被害者感情を傷つけるとも思い、反発も感じました。

しかし、書かれているものを読むと、

少年の生育環境も悲惨でした。社会が手を差し伸べられなかったのかも考えるようになりました。

ジャック・デリダが「死を与える」の中で、「赦しが当然与えられるべき事例について考えることは赦しについて考えたことにならない。赦しについて考えるということは、赦しが絶対に不可能な問題において赦しうるかを考えることだ」といったことを書いています。その頃から、被害者が到底受け入れられない事件で赦しが可能かを考え始めたのです。

司法にも問題があると思います。裁判での出来事は一般の人にはわかりません。傍聴するか、裁判ウォッチャーのブログでわかる程度です。裁判記録の閲覧も難しいと弁護士に聞きました。起きていることをメディア経由で誤解したまま受け取ること、問題だと思います。

—— 「死刑を容認するか」と「被害者が赦すか」は別の話ともお考えですか。

心情的には共感しますが、被害者や遺族も共同体の一構成員ですから、思っていることを制度に短絡させることはできません。制度は感情を抜きにしてはできませんが、そのまま実現させるかには議論が必要です。傷害や強姦で加害者を同じ目に遭わせたくても、国家は実現させないのに、死刑だけ国家が代理すべきという考えになっています。

赦しの問題はずっと考えています。本当に難しいことだし、遺族にそこまで求めるのは酷と思いました。すごく傷ついているのに、犯人を赦すのはハードルが高い。赦せないのも仕方がない。ところが、死刑反対を言うと、必ず「赦せるのか」の話になります。

国家は、基本的に人権を尊重して人の命を奪わない共同体です。例外的に罪を犯す人はいるけれども、原則は変わらない。そこは分けて考えないといけないと思います。

遺族の気持ちになって考えろと言う人は、遺族の気持ちを単純化しすぎています。死刑を望まない遺族も、少ないかもしれませんが、います。死刑を望む遺族の被害感情にも、犯罪被害者としてではなくフランクに人と接したいとか、話を聞いてほしいとか、色々なものがあります。

ただ、遺族の話を聞けという人は、それらを無視して、「恨み」だけを考えがちです。そして、犯人が死刑になると、以後は遺族にノータッチだったりします。遺族に寄り添うには、憎しみに共感する以外にも、温かく接するなどの方法がある。社会も国家も今までそれが欠落していたから、遺族問題をどうするかというときに、憎しみの代理ばかりがフォーカスされます。被害者のその後の生活を国家が保障するとか、心のケアの治療費などを国が持つとかの制度を充実させる必要があります。そうでないと、なぜ加害者のことばかり考えるのかという、アンバランスさに対する不平が出ます。悲惨な状況で家庭が崩壊した被害者家族の事例もあります。

—— 我が国の人権教育についてはどう思われますか。

日本は人権に対する理解と教育に失敗していると思います。以前、人権についての小中学生の作文を聞く機会があったのですが、ほとんどがコミュニケーションの問題がテーマでした。その合わない友だちに冷たい態度をとってしまった、これからは仲良くし

たい、などです。権利問題は、障害者が街で施設を利用するときにバリアが多いというテーマのものがあっただけでした。人権概念がヨーロッパで生まれ重要になったこと、それに基づき憲法を作り今の国家があるといったことの理解が欠落しています。心情教育に偏っています。心情的に共感できない人や擁護しにくい人たちの権利が侵害されているときにこそ、権利擁護の問題を考えなければなりません。オウム事件のような、遺族も社会も到底赦せない事件でこそ、死刑にすべきでないと言えるかが問題です。あれは例外と言うのでは、だめです。

—— 「最高刑だから死刑を望む人もいる」という話もしておられました。

この点、弁護士会は、迷いながらも、終身刑の提案を検討しています。

最高刑が科されないと納得できない遺族の気持ちはわかります。判決文でも死刑にあたるまでは言えないという表現に納得できないという気持ちはあるでしょう。終身刑を最高刑とすると、ありうる最も厳しい刑罰が科されて納得する人もいます。逆に、拷問のうえ死刑とか、打ち首獄門とか、より厳しい刑があり死刑が2番目だったら、私の家族は苦しんだ上で殺された、もっと苦しめたくて殺してほしいという人も出て来ると思います。

メディアは一種のステレオタイプを死刑について作っています。死刑にしたいとのコメント、あるいは死刑を求めないなら反省して更生してほしいというコメントを遺族に期待しがちです。しかし、加害者が更生して立派な人間になったということが、本当に被害者にとって意味があるでしょう

か。僕はそのことを「決壊」を書いた時に身悶えしながら考えました。そういう物語に簡単に当てはめるとすぐ抵抗があると思います。当事者の感情はそんなに単純ではありません。

死刑をなくした場合、段階的には終身刑が必要でしょう。接することはない状態は最低限作らなければならないと思います。それはペナルティとして必要と思います。

—— 日本の死刑の現状についてほかに疑問はありませんか。

新聞記者と話していると、政治日程の中で、今の大臣こういう人だからとか、政治スケジュールからすると、とか、そんなような事情で、何人死刑にするとかが考えられているようです。そこに僕は、うまく言えないけれど、国家がやることとしてはもの凄く不潔というか、反感を覚えます。人間に対する物の考え方ではないと思います。記者はある程度執行の日程を知っているのか、あの死刑囚があと何時間で死刑になるとかいうことを生々しく感じています。一般の人は、そういうところが情報として抜け落ちているから、死刑のリアリティということが感じられないのではと思います。

—— 「決壊」や「ある男」は、殺人事件の関係者を取り上げた作品です。

例外的出来事に着目しながら人間や人間社会の普遍的課題を考えるのが、ドストエフスキーの時代からの文学の伝統です。犯罪や殺人の中でも、死刑は特殊です。そこから短絡的に普遍的な何かを引き出してもいいかもしれませんが、やはりそこに共同体全体で考えるべき問題が特殊に凝縮して含まれています。

元々犯罪に興味があったわけでは

ありませんが、人間の行いを考えていくと、どうしても法律を考えざるを得ません。法律がどう作られるか、何に基づいて作られているかを考えると、憲法や政治の問題も出てきます。そういうシステムを思考しなければいけないと思ったのです。

大きいのは、自分がロスジェネ世代という点です。この世代は自己責任論で処理されてきたことへの不満がすごくあります。就職のタイミングが悪くて苦労したのに自己責任みたいに言われたとか。作家でもこの世代は社会問題に関心を持っている人が多いと思います。

社会問題も抽象的に考えがちですが、突き詰めると、政治の問題と法律の問題に突き当たらざるを得ません。そこから興味がいつの間にかそちらに振れていきました。

僕は、活動家タイプではなく、集会で演説するタイプでもありません。ただ、呼ばれる機会があり話をすると、反対の立場の人もいて、議論で自分の考えも練られていきますから、そういう機会には顔出すようにしています。

—— 発信しようと思っていたんですか。

20代の頃は、小説で表現すべきとの思いも強く、政治的コメントはほとんどしませんでした。ただ、政治を考えることが増えたのと、SNSの発展で小説と違う色んなことを語る次元ができた。そこにいる以上は、音楽や食べ物の話と同じように、政治の話もするのが市民のあるべき姿で、そこだけ抜くのは不自然に思うのです。

—— 被害者への手当がなければ死刑廃止も奏功しないと思っておられますか。

強く思っています。心情レベルで被害者に対して共感することのほか、大きく損なわれた彼らの権利に対しても、国家ができることをもっとやらないと救われぬ。光市の弁護団と接触して、僕は、安田好弘弁護士は、今では立派な人だと尊敬もしていますけど、死刑廃止の世論喚起のためにはあのやり方は功を奏したとはいえず、逆効果で反感も買ったと思います。殺され損じゃないか、なぜ加害者の肩ばかり持つのだという反感です。それは、伝えました。

正論として権利問題として考え直すことは主張しつつ、被害者のためにやることも考えていかないと、世論は動いていかないとします。

—— 教育も大事だとお考えですか。

教育と文化ですね。ドラマや漫画や小説やお笑いです。日本は人権意識が著しく低いと思います。特にお笑い番組です。戦後のお笑いを振り返ると、差別やセクハラがとても多いと思いますね。

「水戸黄門」も、懲らしめたら相手が参りましたって従うって考え方で、そういう認識で大人になっている人がたくさんいますが、それも違うと思うのです。時代劇は大体、近代以前の世界観ですから。

—— 法学部や法律のこともお聞かせください。

大学に行かない法学部生でしたが、憲法・民法・刑法など基本的な法律の単位はとりました。改憲論議で憲法の本を読み直しても、何が問題かわかります。文学部出身の作家とは、そのところは違うと思います。

政治思想史の小野紀明先生のゼミでした。実定法から考えるより、ヨー

ロッパの政治思想にどういう流れがあり、その中で自然法が想定されて、自然権として人権が必要とされたということを考えました。一種フィクションでしょうが、そうでない歴史と比べると、やはり人間は生まれながらに権利を持っているということを社会の共通の価値観としようとしたヨーロッパの歴史は正しかったと思います。それを歴史の流れの中で学んだことは、法律や思想について考えるためには大事で、それが法学部の授業にあってよかったと思います。

当時の京都大学には、国の役に立つのだと官僚を目指してムキになって勉強する雰囲気はなく、柔軟に法律の勉強できたと思います。

—— 弁護士を目指す気持ちはなかったですか。

大学の5年間で、断片的に一瞬思ったのを足すと10秒間くらいにはなります(笑)。5年生になることになって、僕が就職活動をしていないと知っていた親は、司法試験の勉強をしていると思ったようです。あるとき小説が雑誌に載るって話したら本当に驚いていました。

—— 「ある男」を書いた際には弁護士に取材されたんですね。

6人くらいに話を聞いたり草稿を読んでもらったりしました。弁護士って、どんな事件のことでも知っているって思っていたんですけど、それぞれ専門があるんですね。刑事弁護をする人が特殊ってことも、取材で感じました。やりたいけれど、子育てを始めると大変という話をされる人もいましたね。

—— 初期の作品の舞台はヨーロッパ、今は全く違うテーマですね。驚きます。

元々外国文学の影響を受けていて、

読んだ小説の舞台が外国でした。よくヨーロッパに行き友だちもいます。そこで相対化された視点があると思います。そういう認識が日本の小説の中にもあるべきと思います。

—— 今後ヨーロッパを舞台にした小説を書かれることはありますか。

必要があれば書こうと思います。ただ、インターネットが登場してかなり色んな情報に日常的にアクセスできるようになって、以前とは異質なものとしての意味合いが変わってきています。

ヨーロッパも政治的には難しい状況にあります。日本の教育はうまく行っていないと思いますが、お手本にする国もないというのが現状に思えますね。

—— 短編で色々な手法・技法を試された時期がありましたね。

小説には、19世紀のバルザックなどが典型ですが、パリという都市を閉ざされたマイクロコスモスみたいなものと捉えて描くことで、人間世界の全体像を捉えられるといったイメージがあります。「百年の孤独」などでも一貫していて、技法が成熟しています。ただ、インターネットが登場してグローバル化すると、ある閉ざされた価値観の中では話が完結しないのです。一人の人の運命が世界情勢とより濃密

に結びついていますし、価値観も四方八方から情報が流れこんで来る中で、小説をどう書くか。新しいスタイルを模索しないと、従来の描き方ではうまく現実を捉えきれなくなって、そのためにどういうやり方があるのか、しばらく短編を書いた時期に試みたのです。大分読者減りましたが(笑)。

でもその時期がないとそのあとの長編は書けなかったと思います。現在の僕の仕事を気に入っている人が遡ると、ここでやっていたことと繋がっているというのが見えます。

文学は、大ベストセラーでも100万部単位、普通なら10万部でベストセラーです。人口の99.9%には相手にされなくても成り立つ世界です。ただ、長い時間かけて読んだ人の意識が変わって行動が変わるとか、ずっと読み続けられていくことで0.1%のところから少しずつ社会が変わると期待する世界です。ですから、「無理解」は普通のこととして受け入れますね。

自分はマイナーな存在と思って好き勝手なことを言っているっていうのは良いんですよ。

(インタビュアー：高橋 司
西原文子)

